

第二期 第五十号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2020. 09. 20 定有堂書店 発行

柳父章さんと「語感」

奈良 敏行

八月、語り、書き残すこと

三浦 永理

美と法

丸 祐一

Black Lives Matter (BLM) と empathy

松田 裕史

絶版書房

三砂 慶明

乾いているが乾いていないもの

萩原 俊郎

人工の風

鳥居 貴彦

八代日記 (一六)

齊藤 仁昭

真夏日の熱帯夜の夢見

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その四十九

内田 克彦

交響作家の揺籃期 ・ 後

秦阜 梅林

世界は矢印に満ちている

芝野 浩貴

滾る小説

古賀 啓三

鳥と魚

あきの素生

拾うひと

ドラマメリア

…… 編集後記

柳父章さんと「語感」

奈良 敏行

(定有堂 店主)

七月の角川ソフィア文庫に『日本語をどう書くか』(柳父章)があった。むかし自主講座「寺小屋教室」で学んだ人だ。没後二年半の文庫化で読者への位置づけが気になった。本来は「翻訳論」という言語哲学者なのだ。帯文にはアクチュアルな入口が示される。「近代日本語の誕生から明かす文章読本」、そして「書き言葉世話し言葉 その違いを知れば、書ける」とあった。うまくまとめている。しかし「書ける」は少し違うかな?と感じた。オリジナル本は一九八一年にPHPで刊行された。(二〇〇二年には法政大学出版社で再刊)。帯文には「語感をとぎすませ!」と主張が簡潔に記される。じつは「伝統的日本語」が、明治二十年代過ぎに始まる「文」(sentence)意識の中で、どのようにして失われていったかの研究の書なのだ。

大学を卒業し、就職したのだが学ぶことへの不完全燃

焼状態がつづく中、高田馬場で行われていた自主講座に足を運ぶようになり、そこで柳父章さんと出合った。本屋を開業してからも交流はつづいた。

この自主講座には複数の講座があった。「在野の学び」でほとんどの記録は残っていないが、「フランクフルト学派研究」「柳田國男研究」「安藤昌益研究」「水戸学・国体論」など、マルクスⅡエンゲルスから土着思想まで幅広いテーマが学び合われていた。柳父さんをはじめ、「ヨーロッパ革命運動史研究講座」講師の大阪修平さんにも、本屋の講演会に来てもらったことがある。

研究団体だったので『寺小屋雑誌』という紀要があった。わたしは自己言及的に「自己意識」の迷宮に彷徨っていただけで、研究というものには関心はなかった。でもなんとなく柳父さんの推しがあつて、書いたものは自由で、語感だけが許されていた。「悪文で主観的な文章だけでも、語感だけは確かにある」という評価ともいえない評価だった。

今にして思えば柳父翻訳言語論の骨子の一つは「語感」にあつたのかもしれない。概念化してそれを「カセット効果」と名付ける。翻訳語は漢字二語で造語されることが多いが、高度な「観念の器」として青年を魅了する。それを宝石箱に例えたキーワードだった。柳父翻訳言語論は、単語論から始まり構文論・文体論へ進んだ。単語

論の中心には「語感」がある。

翻訳語における漢字二字の名詞の機能は大きい。新しい概念を受容しようとするとき「大事なところで漢字の名詞を頼りに思考を進める」のだが、漢字が本来的に持っている意味に制約され、「ズレ」が生じる。語感は「言葉と現実の微妙なズレ」に気づくところに生じる。

時枝誠記言語学は、詞(し)と辞(じ)を、「詞」は「概念過程を経て成立したもの」「主体に対する客体界を表現」。「辞」は「概念過程を経ない主体それ自身の直接的表現」と説明する。翻訳語はこの「辞」を抑圧するのだと柳父さんは参照する。わたしは、いつも「観念」と「現実」の齟齬の前に立ちすくんでいた。もし観念と現実がそぐわないとき、どちらを選ぶか、と問いを立て自滅する。ここに「解」はないのだが、柳父さんは、それでも「語感がある」と救いの手をさしのべてくれた。概念で考える、青年一般の難関(アポリア)に対する、普遍的解答であつたのかもしれない。この「ソゴ」を主題として、その当時わたしは『定有』という小冊子を刊行していた。横断的に、わたしの観念的生活圏の中の人たちが、寄稿してくれていた。

文体論では、西欧語の文章の翻訳に対応して、「文」の意識が生まれたのであり、「文末をはっきりさせる」というのは、伝統的な日本語文にはない、という主張だっ

た。「まともな伝統的日本語文は、ただ言いたいことの意味内容を伝えるだけでは終わっていない」(一四八頁)「終助詞によって相手にうったえる」「終わりは相手にあずける」(九七頁)と考えた。

自分で理解しきれていないことを書くことで明らかにしていく、それが自己言及的な文章だ。それは「分かりやすい文」とは無縁の営みだと思う。「語感」が相手に手渡されるだけだ。柳父さんは、「その人じしんの好み、気質に従う以外にない」(二〇二頁)と、その文体論をしめくくる。

2020. 08. 14

柳父章『日本語をどう書くか』角川ソフィア文庫 2020

『寺小屋雑誌』寺小屋教室 編集・発行

小阪修平『イラスト西洋哲学史 新版』宝島社 2019

(イラスト ひさうちみちお)

太極拳教室 (会場 定有堂二階) 葉香クラブ (荷葉)
毎週 水曜 十九時半から ・ 土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員



定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示



八月、語り、書き残すこと

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

鳥取に移り住んで、五ヶ月。それまで、東京で必死に人の間を縫うように生きていたのだから、人生はわからないものだなと思いつながら、筆を取っている。

と書き出したものの、私は正確には筆など取っていない。この文章はいきなりパソコンに打ち始めている。教員になったにも関わらず、不器用なせいかきれいな文字をかけた試しがない。それでも、毎日ではないものの、日記を書くようにしている。その日にあったことを忘れてしまうことは容易い。なるべくなら文字にして残しておこうと、大学時代から気の向いた時には書くようにしている。私の場合、そのゆるさが続けるコツだった。

時々昔の日記を振り返るとその時の自分の悩みが手に取るように思い出せるのに加えて、自分の成長したところ、少しも変わらないところが見えてくる。何より、自分の手で選んだ言葉だから叶う体験だろう。他人が語る私であつたら、ここまで鮮明に単なる文字から思い出は

立ち上がらないのではないだろうか。

そんな風に、私は読むことと同じくらい、書くことの執着がある性分らしい。そんな私に、「英語の先生なら」と店主の奈良さんが『日本語をどう書くか』（角川ソフィア文庫）を薦めてくださった。

夢中になって読んでいる最中、思い出したのは、祖父のことだった。

三年前、戦中に少年時代を過ごした祖父が亡くなった。健康に気を遣っていた人だったのだが、最期は肺に影響が出て、言葉少なに静かに逝ってしまった。神戸の近くにある海の見えるきれいな病院だった。

亡くなった直後、ふとした拍子に、彼が商船大学の同窓会会報に残した文章が、突然私たちの前に現れた。その文章の内容は昭和二十年代の大学時代を振り返る、至って平凡な物だったが、その文章は「である」という常体と「です・ます」の敬体が混ざり合ったなんとも奇妙な形式であり、その印象だけが強く私たちに残った。あんなにきっちりした人が、何故そんな文章を書いたのか。常体と敬体の使い分けを習わなかったのだろうか。私たちには奇妙な違和感が残った。

『日本語をどう書くか』の第四章に出会ったとき、私の頭に浮かんだのはその違和感だった。第四章は、文末

語について割かれている。日本語の文章は、長らく読み手を意識して、常体と敬体の混ざった文体であった。故に、本書の中でも取り上げられている小林秀雄の文章のように、近現代でも常体と敬体の混ざった文体は多く見られた。それこそが日本語らしいリズムを得た血肉の通った文体であったのだろう。ならば、祖父自身は、そのような文体を粹だと感じて、筆を取ったのではなからうか。ふとそんな思いがよぎり、私は東京にいる父にそんな話をしてこの本を薦めた。

父は、自らの父親を失ってからしばらく、彼の残した大量の写真を保存しようと、全てスキャナーにかけてファイル化していた。父は歴史好きな性分なので、「これはこの時代だから」と自らの解釈を私に披露してくれた。その一方で、いつの写真ともわからないようなものも出てくる。時系列がわかる証拠がなかったり、状態が悪くなっていたりするものもあった。

「もつと親父と話しておけば良かったな。」
とそんな作業の最中、父が言葉をこぼした。

語らなかつたことは残らない。語つたことは残つてしまふ。特に文字に残してしまつては。

形に残らなかつた文字のことを考えては、残してくれていたなら、どうなつていただろうかとも思う。残念なが

ら、亡くなった祖父は筆まめな人ではなかつたので、私の手元には何度か送ってくれた定型文の誕生日カードだけが残っている。祖父は、戦中戦後の少年時代をどのように過ごしていたのだろうか、高度経済成長の中、どのような仕事ぶりをしていたのだろうか、私にはわからない。果たして、祖父が文字に書き残してくれたところで、その文字からきちんと物語が立ち上がったのだろうか。

ふと、この夏は戦後七十五年だったのだということも思い出す。語られなかつた言葉たちが、どんどんと帰るべき場所へ帰っていく時代になった。私が祖父からどう思うか、どう思い出すかがなくなつたように。果たして、どのように語り残すことが、書き残すことが、その思いに見合うものになるのだろうか。どうすれば、血肉の通つた言葉になるのだろうか。

はかなく頼りないながら、残された言葉をたぐり寄せ、今日も私は生きていきます。

丸 祐一

(法哲学者)

コロナ禍の為にほとんどの美術館・博物館が閉館を余儀なくされ、今も再開していないところがある。そんな中、東京都現代美術館で開催中のオラファー・エリアソンの展覧会に行ってきた。古代ギリシヤの詩人のように自然現象を芸術作品へと結晶化したオラファーのインスタレーションは面白かったけれども、若い人、特に若い女性が多くて他の美術館との客層の違いに驚いた。ZINEの日曜美術館を見ている層とも違うように思うし、ロコミなのだろうか？東京ステーションギャラリーのパウハウス展も比較的若い人が多かったが、服装から思うにデザイン系の人たちで、また少し違う客層であった。

今ではこのように美術館に行くようになったが、生まれ育った地域には美術館はおろか映画館さえなかった。なので、子どもの頃にこの種の文化資本に触れる機会はほぼなかった。そういう地域では今でもハイブローな文化

に触れる機会はほぼメディアを通してであるし、育った地域と無関係に、妻はまったく芸術に無関心である。したがってコロナ禍で美術館や舞台が閉じられたとしても彼らの日常生活にはなんら影響がない。経験的には、そういう文化圏では教科書や入試問題で他の文化圏との共通言語を手に入れることが多い。だから、例えば学校で教える内容があまりにバラバラになると多様性が増せば増すほど、文化に関する最低限度の共通言語を失う可能性がある。バベルの塔の様相である。そういう意味での共通言語は、戦間期生まれの祖父や祖母と私のあいだではすでに失われていた。そうなると民謡や神楽や方言といったその地域の文化が共通言語(社会的紐帯)となりうるが、他の地域で育った同じ世代との共時的な言語とはなりにくい。もちろん、必ずしもハイブローな文化を共通言語とする必要はどこにもなく、実際、漫画やゲームなどのサブカルチャーも十分に共通言語たりうるのは周知の通りである。このような共通言語の確保という文脈の中で、多文化主義の是非や、なぜ芸術・文化が保護されなければならないのか、という問題は論じられている。例えばキムリツカは、社会構成的文化の維持・促進のために国家が一定の役割を果たすことを求めている。しかし、ハイブローな文化については、その価値を直接享受する人が限られているにもかかわらずそれでもなお国家

によつて保護されるべきであるとすれば、それはなぜだ
ろうか。実は、学問の自由も同様の問題を抱えている。
学問の自由が直接保護するのは研究者というごく一部の
人々の自由であつて、多くの人には直接関係しない。し
たがつて、「人権」という全ての人が享受すべき権利と
して「学問の自由」を位置づけるのは何かおかしなとこ
ろがある。国家による文化の保護は社会的な側面が大
きいので(国家が文化に介入しないという意味では自由権
でもあるが)、学問の自由と一緒にしてしまうのは乱暴だ
が、その利益を直接享受する人が少数であるという点で
は同じである。

私自身がハイブローな文化に関する学問に触れたのは
大学に入学してからであつた。小河原誠先生の、プラト
ンや柳宗悦やゴンブリッチにおける「作者の意図」を巡
る議論を比較する講義を受けたのが初めての美学体験で
ある。小河原先生の問題関心は私の修士論文の研究テー
マへとつながり、芸術の解釈と法の解釈における「作者
立法者」の位置づけを巡る論文を書くことになった。

法哲学の一分野である法解釈学方法論に関する論文を書
いたということになるが、法哲学は真善美のうち美の問題
にどこまで関わることができるのだろうか。法も美的
な評価の対象だとラートブルフは言っているが、法は正
しくある必要はあれども、美しくある必要はないのでは

なからうか。法哲学には「法と文学」という学問領域が
あり、そこでは文学における法の問題を扱う。戯曲や映
画をもとに、法は何のために存在するのかを解き明かす
木庭頭の『誰のために法は生まれた』(二〇一八)は、そ
のうちでも特に優れた業績である。

言葉を直接介さない表象芸術についてはどうだろうか。
クリムトがウィーン大学に依頼されて『哲学』『医学』
『法学』をテーマに絵画を制作した例はあるが、法が絵
画に表象されることはほとんどないように思われる。と
はいえ、近年では表現の自由や知的財産権の問題からこ
れらの芸術に関する法的な問題は増えているし、例えば
クレア・ビショップは『人工地獄』(二〇一七)で、倫理的な善し悪しで作品を評価しようとする美学の
「倫理的転回」について言及している。そういう切り口
であれば、法哲学も「美」そのものに関する問題を取り
扱うことができるかもしれない。しかし、ニーチェやバ
タイユのような美学に魅力を感じる私としては、「倫理
的転回」は「美の法化」を引き起こしてしまい、美が持
つ生命力を奪ってしまうように思うのである。

Black Lives Matter (BLM) ~ empathy

松田 裕史

(高校教員)

「Black Lives」は「黒人の命は」「黒人の命も」「黒人の命が」と様々に訳せるが、助詞の選択が文のニュアンスに大きく影響を与えるため、訳の妥当性について論争が巻き起こった。一旦、助詞の問題やBLMの背景は置いておく。

「Black Lives Matter」を機械的にでも正確に和訳できる高校3年生は3割に満たないのではないかと思います。まず、「Lives」が「Life」の複数形であることに気づかない生徒が少なからずいる。ここで躓くともう解釈はできない。次に「matter」の自動詞用法（「重要である」）を知らない生徒はかなりの数に上る。そもそも「matter」は名詞としても物質、物、問題など複数の意味を持つ多義語でありやっかいな単語である。

約三か月前の五月下旬、BLMの報道は日本でも加熱していた。日本の報道を見ているとまるでBLMが降って来たような事件のように感じられてしまうが事実はその

ではない。例えば AFP-jiji の記事には「the latest in a long line of unarmed black men being killed by white law enforcement officers in the U.S.」という文言があった。つまり、「無防備な黒人が白人の警官に殺される一連の事件における最新のもの」ということだ。私もBLMについては勉強不足でよく知らなかったが、今回は特にいくつかのラジオを番組を通じて知ることとなった。中でも「*松尾潔のメロウな夜」（七月二三日放送分）では歴史的な背景に昨今の米国音楽シーンを重ね合わせる内容で印象的だった。

BLMの発端は二〇一二年にフロリダで黒人の高校生が不審者とみなされ、不当にも射殺されるという事件であり、二〇一四年にも警察官の暴力を受けて黒人が窒息死するという事件があったそうだ。Black Lives Matterという文言は二〇一二年に事件を受けてSNSに投稿されたのが最初だ。BLMは翻訳する時に「ぼれ落ちるもの (Lost in translation)」を防ぐために、カタカナでそのまま表記するのが一番いいんじゃないかと松尾潔は言う。番組の最後には、差別や差別を生み出す構造に目を向けなければ米国のRBを裏打ちする本質は理解できないのではないかとまで言い切った。そのラディカルな松尾潔の認識こそ目を背けずにいたい。

番組内で紹介された楽曲の中では、事件に呼応するよ

うにリリースされた[※]E.R.の新曲が痛切に心に響いた。曲名は「I can't Breathe」。ただし、抗議を直接的に、あるいは煽情的に表現するのではなく、あくまで今回の出来事を昇華させて静かに、聴く者に問いかける内容となっている。歌詞を確認する中で empathy という言葉を見つけた。Where is the hope and the empathy? (希望と共感はどこへ行ったのだろうか?) 「共感、感情移入」と訳される言葉だが、ブレイデイみかこの「ぼくはイエローでホワイトで、ちよつとブルー」でもキーワードとなっている。この本におけるそれぞれのエピソードは確かに面白いが、ブレイデイみかこやその中学生の息子が「empathy」や「多様性」の前で、あるいはそのただ中で逡巡し、惑いながらそれらと共に在ろうとする物語だと私は読んだ[※]。私の中ではまだ、empathy や多様性は宙づりになったままだ。さらりときれいに理解や納得するのではなく、新たな問を読者の中に喚起すること、それも著者の狙いの一つなのかもしれない。ちよつどブレイデイみかこは「文藝界」の四月号から empathy をめぐって論考を書き綴っている。

「I can't Breathe」以外にもビル・ウイザーズの「Lean on Me」[※]、ホームズ・ブラウンの「Say It Loud, I'm Black & I'm Proud」[※]、マイケル・ジャクソンの「Black or White」[※]より広い視点でマーヴィン・ゲイの「What's Going On」

を聞きながら、ブレイデイみかこが連載する「アナーキック・エンパシー」がどのような結末を迎えるのか待ちたい。

[※]音楽プロデューサー。元々は音楽ライターであったが久保田利伸の誘いでプロデューサーも手掛けるようになる。日本の音楽シーンに[※]を根づかせた貢献度は極めて大きい。

[※]一九九七年生まれ。数十年に一度の逸材と呼ばれ、新デイベーの呼び声高い米国の[※]歌手。固有名を排し、「彼女の」という代名詞、言い換えれば限りなく匿名に近い名前を使っている意義を[※]を機に考えてみたい。

[※]「波」(新潮社)の7月号のインタビューでは「「ぼくイエ」で描きたかったのは社会なんです。社会の矛盾や不条理、あるいは病理のようなものは、子どもたちの世界に露骨にあらわれる。」とブレイデイみかこは語っている。

三砂 慶明

(読書の学校)

前略 ごめんくださいまし。はじめまして。

だしぬけですが、「音信不通」第四十九号で奈良さんにご紹介いただいた三砂慶明と申します。手さぐりで続けてきた「読書の学校」という企画が、読書の啓発運動だったとは！ 奈良さんに言われてはじめて気がつきました。本好きがいて、本屋好きがいて、読書好きがいる。本の生態系に自分もちゃんと生息していたのだなと大切な気づきをいただきました。ありがとうございます。

今回、ご縁をいただき「音信不通」に参加させてもらえることになりました。自己紹介をかねて、どうやって定有堂書店にたどりついたのかをお伝えします。

私が働いているお店も、コロナ禍で店舗を一時、閉じることになりました。行政からの指示で、お店を閉じるのはじめてで、でも外には本が読みたい人がいる。何

かできないかなと漠然と考えていたら、同僚がネット上のオンライン企画に誘ってくれました。「本を開いてどこまでも」という家の中においても、本を開けばどこまででも行けることを感じてもらえたら、と考えた選書企画です。

ありがたいことに、私が選書した本を買ってくれたお客様が、たまたま鳥取出身で、同じ本を自分用にだけではなく、プレゼント用に二冊！ も買っていたくれました。本を贈り物にするのは、私もよく失敗する高等技術だったので、どうやってのですかと失礼ながらお客様にメールでおたずねし、逆にお客さまからおすすめの本教えてもらう、とても素敵な交流になりました。

なかでも印象深かった本が、もつと率直にいうと知らなかった本が、定有堂書店刊行の濱崎洋三著作集『伝えたいこと』でした。検索してみたら、『どちらであつても』の徳永進さんが推薦文を書かれていたので、これは絶対に読まないといけないと考えました。

定有堂書店は、『BRUTUS』709号「本屋好き。」特集ではじめて知りました。敬愛する本屋「往来堂書店」の成り立ちに関わっておられると知って、いつかたずねたいと思っていました。(ちなみに、私は「読書の学校」という企画で、敬愛する本屋の先輩をお招きする書店の会を年に一回開催しています。この会に、是非奈良さん

をお招きしたいとラブレターを書く予定です！　どうか届きますように！）

本を深く読み、本屋を愛しているお客様におすすめてもらえたのは啓示かもしれない。「いつか」は「いま」なんじゃないかと思いましたが。

私の行動原則は単純です。思い立ったが吉日で、大体三つ以上の興味が重なる、何かいいことが待っています。知らないことを知ることが読書の醍醐味だとすれば、それはきつと人生も同じはず。今回も直観どおり、大正解でした。

奈良さんとカウンターごしにお話し、素らーめんをすすり、宿泊施設でビールを飲みながら『街の本屋はねむらない』を読み、「音信不通」のバックナンバーを読ませていただくうちに、奈良さんの哲学に目が覚めました。

……というようなことを奈良さん宛につらつらと書き綴っているうちに、「音信不通」に誘っていただきました。半ば無理やり参加したような形かもしれませんが、どうかお許しくださいませ。

もしかすると同志の皆様はお気づきかもしれませんが、私はいつも行き当たりばったりなので、参加しますと答えた後に、肝心の書くことが何もないことに気がつきま

した……。お恥ずかしいかぎりですが、奈良さんにどうしたものかをおたずねすると、「会読」というテーマを与えていただきました。「読む会」の課題図書『江戸の読書会』につながるテーマとのことで、いつか「読む会」に伺いたいな思っている私には、嬉しい企画です。しかも、「会読」は、何人かの人が集まって読書し、それについて話し合ったりすること。まさしく私が一番大好きなことではありませんか！

ただし、考えてみると私が大好きな本は、いつも大体、品切重版未定かすぐに絶版してしまうので、紹介する本は哀しいかな。本屋では手に入りません。

敬愛する建築家、石山修武さんが発行していた「絶版書房」の名前を勝手にお借りして、大好きな本とその周辺についてお話できれば幸いです。いつか「読む会」にもお邪魔して皆様と一緒に本の話ができることを祈念しております。

音信不通の読者の皆様

三砂慶明拝

草々

乾いているが乾いていないもの

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

8月5日、アメリカのコラムニストで作家のピート・ハミルが亡くなった。八十五歳。

新聞はそろって「映画『黄色いハンカチ』の原作者」という見出しで、まあ、日本ではそう紹介するしかないのだろうが、ちよつと寂しく感じた。あの映画は、高倉健以外は少々ウエットII情緒的過ぎるから(悪口ではない)、彼のイメージが誤解される恐れがある。

ただ、奥さんはベトナム戦争で亡くなった戦場カメラマンの沢田教一を描いた『ライカでグッドバイ』で知られるジャーナリスト・作家の青木富美子。彼自身も、代表作の『ニューヨーク・スケッチブック』にもじって、日本の不登校生徒や東京に迷い込んだガイジンが登場する短編集『東京スケッチブック』まで書いている日本通

である。

彼の訃報に、私も少々「ウエット」になって(笑)、持っている『ニューヨーク・スケッチブック』や自伝的な『ブルクリン物語』、オプ(私立探偵)小説『マンハッタン・ブルース』に加えて、図書館から『東京スケッチブック』『ニューヨーク物語』『イラシヨナル・レイビングス』『アメリカン・ジャーナル』を借りて、もう一度読み返している。乾いた文体の中にも、押し付け気味ではない熱い魂や人間への共感を感じて、いいなあと思う。

ピート・ハミルに惹かれたのは、何より彼が新聞のコラムニストだったからだ。

「コラム」というと、日本では『天声人語』や某地方紙の『海潮音』などの一面下の囲み欄を思い浮かべる。いかにも世間を達観したような、「お前は何様だ」と思いうような「高尚な文体」(を装うこと)が多い。

だが、アメリカの新聞のコラムは違う。市井の人間に起きた小さな幸福、あるいは不幸な事件、時には何も起かない平凡な日常の風景をドライに(客観的に)描いて、しかも大衆の心をつかむ。

やがて社内で一面下のコラムや論説を書けることになった私は(それは新聞記者にとって無上の喜びであり誇り

なのだが）、無謀にも「できれば従来の日本のコラムとは違うものを、地方新聞で書けないか」と考えた。

反体制の匂いがプンプンするピート・ハミルのほか、シカゴ・トリビュン紙の花形コラムニストで健全な中間層を代表するボブ・グリーン、私は運動記者出身なので野球小説の名手、バーナード・マラマッドの短編、あらゆる権力をユーモアで笑い飛ばすアート・バックウオルドなどからその文体をかすめ取ろうと試みた。

が結局、私の「日本の新聞にアメリカのコラムを移植しよう」という企みは、徒勞に終わった。

コラムへの評価によって新聞社と掲載契約を結ぶアメリカとは違い、日本はしよせんコラムや論説の部署に配属されたサラリーマン記者に過ぎない。急に「お前しか書けないコラム」を書かれても、会社としては人事上困るのだった。

今やアメリカも、味もそっけないウェブ・ニュースが大半を占め、朝に配達された新聞のコラムを夜ロッキングチェアに身を預けてじっくり味わうなど、過去の遺物となった。あの「乾いているが乾いていない」文体に触れる喜びはもう失われたのだろうか…と思っていたら、

意外なところで見つけた。NHKドラマ『植物男子ベランダ』。

東京のマンシヨンのベランダで自己流の園芸を楽しむフリーライターでバツイチの中年男。

「新聞やテレビ、インターネットの情報の渦の中で、オレたちはしゃべり過ぎ、見過ぎ、聞き過ぎる。でなければ不安になり、毎日を暮らせないようになってきているだ」。うーむ、ハードボイルド。

そして愛用の銃ならぬジョウロを片手につぶやく。

「美学なんて、ごまかしの積み重ねだ。人は面倒な時によく美学という言葉を使う」。チャンドラーやハメツトの完全なオマージュ！ いうていこう、さすがだ。

新シリーズや再放送が待ち遠しい。

人工の風

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

急に雑誌の取材依頼がいつぱいくる。この2ヶ月で3件? そんなにたくさんとりあげられたらすぐ飽きられるにちがいない。怖い。と思っていたらテレビに出ませんかという電話までかかってきた。目の前の人にすら何回も「え?」と聞き返されるような喋り方しかできない奴がテレビはダメでしょう。「もうちよつと声張ってもらえますか」とか言われて、ああすいません、とかボソボソ言っている自分が容易に想像がつく。だめだ。申し訳ないのでお断りします、と言おうとしたら電話の相手が「お近くなんでねえ」と言い出した。制作会社が徒歩2分のところある。ううう。そんなことあとから言わんとい

取材を受けるたびに言うのだけど毎回微妙な反応をされて終わる話がある。「ヨットと本屋は同じ説」。これまで何人ものライターさんやら記者さんやらにことあるごとに言ってきたのだがみんな「ああそうですか」という顔をしてメモすら取ってくれない。かなしい。もちろん記事にもならない。かなしい。今日もディレクターさんに言ってみたのだが「へえ」と言われ終わった。かなしい。もう言わない。いや言う。だれかちゃんと聞いて。

ディレクターさんの話を聞いていると軽トラがやってきた。毎週火曜日は古紙回収のおっちゃんが出てくる日。ダンボールやらチラシやら。たまにもうどうしようもない古本もお願いする。高校の文集とかね。そんなもの引き取るなよ、と自分でも思う。「これはあかんねん」と申し訳なさそうにおっちゃんという。布張りの本やピニールは機械に入らないらしい。「誰が入れたか見られてんねん。そいで持って帰れって言われるんや」と本当に申し訳なさそうに言う。そうですか。そしたらそれ以外のやつおねがいします。

ふと思いついて、ところで御所の向こう側っていかないのですか、と聞いてみる。丸太町通ずつと行って、河原町通の一本東の通りなんですけど。「えーつと」と言うおっちゃん。「府立病院のどこかな?」いや府立病院よ

りもつと南の。「府立病院のとこの八百屋には毎日行くんやで」あー、どこやるそれ。たぶん近いけどちよつと違うんですけどね。本屋さんがあって、古紙回収にちよつと困ってるみたいやったからのぞいてくれませんか？「ほなこのあと行ってみますわ」と運転席から小さなメモを出してきた。震える手で河原町通と丸太町通を十の字に書く。書きましよか、というと「脳卒中の後遺症でね」といいながら鉛筆を渡された。メモはなんかの裏紙の束だった。

外はあまりにも暑すぎて風が吹いているのかもわからない。店に戻るとHi cafeの吉川さんにもらった扇風機と助成金で買ったエアコンが冷たい風をかき回していた。人工の風。つくられた風に生かされているわたしたち。ほんとうの風が吹くのはまだ先なんだろうな、と思う。助成金と、補助金とでギリギリ生かされている日々。売り上げだって人からもらったお金じゃないか。でも全然違うよね。なんというかぬるさが。ヌルヌルしているお金。エンジンで動く船もヌルヌルしている。ガソリンが。風だけで動くヨットは……。とかいうこの話、きつと誰も必要としていない。だれか聞いて。

徒歩2分の会社に帰っていくディレクターさんの背中

を見送る。徒歩2分とは事務所の玄関に入っていくところまで見えてしまう距離なのだね。今日はやけに高知の本屋の話ばかりしたな。昔の話をしながら昔の記憶を作っているのかもしれない。なんども話すことで自分を作っている。そのときはなんも考えずにやっていたことを無理やり今につなげている。10年後には10年前の話も全く違っているのだろうか。全然違う思い出として話しているのだろうか。それはなんちよつといやだ。ずっと座っていたので腰が痛い。痛み止めの薬とコルセットに生かされている。風が弱いときのヨットも、じつとに変な体勢で走らせるから腰が痛くなるよ。という誰も必要としない情報。だれか。

八代日記

(六)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

八月某日

引越し屋を頼む余裕はなかったので、3週間くらいかけてようやく前の家の荷物を移し終えた。引越すときによく思うのは、洗面所や流し台の下の戸棚の収納が苦手だということだ。いつ使うんだかわからない洗剤や石鹸やホテルの歯ブラシやビニール袋などが排水管の側に密集している姿が生理的に受け付けられない。一人暮らしの時は何も入れないくらいだったが今はそうとも行かず、我慢して詰め込んだ。そして自分ではあまりもう開けたくない。

カボチャやメロンを割ったときに見える密集した種を見るのが生理的にしんどくて、あまりの気持ち悪さに丸ごと投げつけたくなるが耐えて種だけ急いで掻き出して捨てている。これと同じ心理なのだろうか。閉ざされた

ところにあつたはずの密集したものが姿を見せるのがダメなのか。そうではなく単に粒々が苦手なのか。でもイクラやゴマなどは平気なんです。ピーマンの種はダメだけど、ヒマワリの種は平気で、自分でもよくわからない。戸棚が耐えられなくても文句が言えないのは、自分は今全く本とレコードが処分できないからであるということ。は言を俟たない。

八月某日

サッカーヨーロッパリーグはまたもセビージャが優勝した。スペイン代表監督とレアル・マドリーの監督を立て続けに解任されたロペテギの感極まった涙にもらい泣き。おめでとう！ 負けたインテルのコンテは来季はどうするのだろうか。シーズン通してフロントと上手くいっているんだかいつてないんだかよくわからないままでコンテらしいもしくはインテルらしいと言えばそれまでだが、もう一年くらいどうですか。

チャンピオンズリーグはバルセロナの負けっぷりが印象的だった。敗退後、クーマンが後任監督となる。クーマンにはバレンシアをめちゃくちゃにした時の印象しかないのだが何がそんなに評価されているのだろうか。わからない。メッシも退団してしまうのだろうか。

コロナ禍により決勝トーナメントの後半はホームアン
ドアウェー方式から中立地での一発勝負に切り替わり、
より白熱した試合が多かったように思う。

八月某日

ケバブジョンソンの初めての7インチシングル『揚子
江/My Sunday Gal』が完成。録音はコロナ前に終えてい
て、ようやく届いた。京都のねむたい目レコードという
レーベルで作ってもらいました。よかったらお聴きくだ
さいませ。

<https://nemuiamerc.thebase.in/items/32590857>

<https://nemuiamerc.bandcamp.com/album/my-sunday-gal-2>

※※

胸のあたりで騒ぎ出す
速いリズムに焼かれそう
もっとさわって
もっとそばに寄って

頭の中で動き出す
変な気分によられそう
もっとさわって
もっとさわって

放り出して強く抱きしめて
転がして甘いキスをして
派手な合図で飛び込んで
ゆっくりと目を開けて
もっとそばに寄って

罰もそろそろあたりそう
すべて忘れてしまいう
でももっとさわって
もっとさわって

放り出して強く抱きしめて
転がして甘いキスをして
派手な合図で飛び込んで
ゆっくりと目を開けて
もっとそばに寄って

(ケバブジョンソン「触れる」 作詞：杉浦真寛)

真夏日の熱帯夜の夢見

ムラカミ ヒロミ

(フライング・ブックマン)

夏日といい、真夏日といい、猛暑日という。

いずれ、厳暑、虐暑、劇暑、極暑、熱暑、焦暑、炎暑といった言葉が日常茶飯に使われるようになるだろう。

今日は、西日本全域が四十度以上の酷暑日になるでしょう。明日は所によって、四十五度以上の烈暑日が予想されるでしょう…。いやはや。

マラルメは、何度も何度も「半獣神の午後」に手を入れた。最初は詩劇として。次に、独白即興詩として。そして最後に、物憂く、気だるい夏の午後神話的物語詩として。

一八六五年の夏、詩人はそれを着想する。そして十年に亘って没を喰らいながら琢磨に琢磨を重ね、鏤骨彫心に努める。「これこそ夏向きの仕事だ」(カザリス宛書簡)

ドビュッシューは、これを題材に、午睡の夢の如き倦怠感溢れるオーケストラ曲を書く。

ディアギレフは、この曲に振り付けをさせ、ニジンスキーに踊らせた。動きの少ない、前衛的な踊りは観客を戸惑わせたが、ニンフが落としていった衣に接吻し、それに続く最後のシーンと相俟って、喧々譁々世評は割れた。

ハーバート・ロス、アラン・ベイツとジョルジュ・デ・ラ・ペーニヤのキャスティングで、この天才舞踊家の半生を描いた。「牧神の午後」のシーンは、ほぼ全曲を盛り込み、ひとつの山場としている。幻想的で美しく、初演舞台もかくやと思わせる名場面だ。如何にもヴィスコンティが好みそうな題材で、事実、それを意識したと思しい演出やオマージュが見られる。しかし、ギリシャの遺跡でも、イタリアの避暑地でも、あまり暑さは伝わってこない。監督がニューヨーク出身だからであろうか。

しかし、ヴィスコンティが描く夏は、スクリーンの外にまで暑さが溢れ出してくる。

「山猫」は、十九世紀半ば、リソルジメントに揺れるシチリアを舞台にした、名門貴族の物語だ。冒頭、屋敷の二階の広間で一家が祈禱をする場面がある。開け放たれた窓から、紗のカーテンを靡かせて風が吹き込んでくる。如何にも熱そうだ。一族は皆、正装である。青い血と、

汗をかかない体質は貴族の証明、といわんばかりである。彼らは、毎夏、領地である村へ行幸する。村民たちの出迎えは、正に殿さまのお国入りを歓迎するが如き仰々しさである。

馬車を連ねて、荒涼のシチリアを行く道中は、黄色く焼けた岩だらけの土地にユーカリらしき低木がぼつりぼつりと生えているだけの不毛、乾燥の大地である。照り付ける太陽は容赦なく、熱風が吹き渡る。到着した一行は、埃まみれ。この風は、北アフリカからの季節風だろう。

「ベニスに死す」では、この南風（シロココ）が疫病を運んでくる。主人公の音楽家はドイツから休養のために、この地を訪れた。暑苦しくもコートにマフラー姿で御登場である。

船着き場の親父が暑苦しい。夜の街を流して歩く楽師たちの姿や口上が暑苦しい。床屋の主も暑苦しい。唯一の慰めは、同宿のポーランド貴族一家の姿であった。分けても、長男タデウシュのこの世ならぬ美しさに魅せられる。

彼はその姿を追って街を徘徊する。辻々では、何かを焼いたり、消毒液を撒いたりしている。街には不穏な噂が流れている。支配人に聞いても、言を左右するばかり。

漸くイギリス人の両替屋が真実を教える。彼は、貴族一家に、同地を離れるよう忠告する。一家が帰国する日、主人公は海辺のデッキで、少年の姿を眺めていた。やがて眠るように項垂れた主人公の額には、床屋で塗った白髪染めが汗となって流れていた。

やはり、イタリア人が描くイタリアというのは皮膚感覚ということだろう。シチリアの夏と、ヴェネツィアの夏は、明らかに暑さの質が違う。ネオ・レアルリスモの面目躍如というべきか。「ローマの休日」や「旅情」では、こうはいかない。

ヴィスコンティも後半生、ドイツを舞台にした作品を作る。「地獄に堕ちた勇者ども」の突撃隊粛清シーンはバイエルンの避暑地だが、湖で泳いだりしているものの夏の空気は感じられない。

「ルートヴィヒ」にしても、主人公が（月王）と綽名されるくらい的人物だから、およそ夏や太陽とは無縁の物語だが、作中、一箇所だけ、夏の夜の小エピソードが挿入される。主人公の後半生の悲劇を決定づける重要な場面だが、やはり暑さは伝わってこない。

蓋し、アルプスの麓の夏は、かくの如きものならん。

鳥取あれこれ

その四十九

内田 克彦 (地域研究家)

一九三一年四月から一九三六年三月までの五年間、白川渥(あつし)は鳥取師範学校の教師であった。白川は、一九四〇年『文藝首都』二月号に発表した「崖」で、一九四一年一月発表の第二回芥川賞候補となった。しかしながら、今年一月発刊の『『文藝首都』—公器としての同人誌』の小川貴也著「創作指導雑誌」という姿勢—戦前下における『文藝首都』の位置」によれば、発刊された一九四〇年二月は、第二次近衛文麿内閣によつて思想取り締まりのための政府機関として、内閣情報局が正式に発足したちようどその時であり、「「崖」は「戦死者の未亡人の再婚問題」という素材が問題視されたことで芥川賞を逃すことになった。

この「崖」は、一九四二年一月昭森社発刊の『村梅記』に、戦後は一九四六年十二月大翠書院発刊の『山椿』に収録されており、一九七七年六月創樹社発刊の『崖 自選初期作品集』に再録されている。同著に再録されてい

るのが、鳥取を舞台にした「柎(ひいらぎ)の庭」である。初出は、『新潮』一九四一年一〇月号で、『村梅記』に、戦後は一九四六年二月大地書房発刊の『鳥』に収録されている。それには、次のような記述がある。

由木はこの四月はじめ、ある役所の属僚としてはじめて山陰のこの城下町に來た。赴任の當座、由木はしばらくお堀端の、家老屋敷を割部屋にした薄暗い玄人下宿に居た(略)

この県立図書館の蔵書には、「鳥取縣八頭郡八東村役場印」が押されており、一九九八年七月に「八東町中央公民館寄贈」とあった。八東村には、白川の教え子の小谷五郎が住んでいたためであろうか。

小谷五郎著『漂鳥の四季』(一九六三年刊、『小谷五郎集成 教育記録編Ⅰ』収録)に次の記述があるほか、『迷鳥の日曆(九十九川先生への書簡)』(同)や『小説雷鳥像』(一九六九年刊、『小谷五郎集成 教育記録編Ⅱ』収録)でも白川のことについて詳しく書き込んでいる。

師範に行くようになった。受け持ちの先生は、いま作家とられた白川渥先生であった。卒業するまで世話をかけ通した。先生の小説、柎の庭に出てきたり、

風来先生の中に出てくる下宿で、新婚早々の奥さんが作って下さった、ぜんざいを食べながら、誠にこんなと叱られた冬の夜を忘れることは出来ない。

因みに、小谷五郎と『文藝首都』との関わりは、『小谷五郎集成 文学編』の中の「文学関係略歴」によれば、一九三一「ママ」年、短歌、詩を投稿、一九四五年、野火抄入選、一九四六年 小説『野禽』文藝首都新人推薦 と挙げられている。

さて、白川の初期の著作の中では、「山々落暉(やまやまらつき)」(一九四四年一月紀元社発刊の『山々落暉』収録)では大山が、「山樵」(『山樵』収録)では樗谿神社の参道沿いの家が、「北の町」(同)では鳥取大震災時のことを取り上げられている。

白川は戦後は大衆小説を書くことになるが、中でも鳥取西高校(小説中は「明道高校」)を舞台にした『風来先生』(一九五九年講談社刊、一九六五年春陽文庫刊)及びその続編となる『風来日記』(一九六四年講談社刊、一九六五年春陽文庫刊)はベストセラーとなった。主人公白戸勉吉の痛快な先生の姿は、まさに現代版『坊ちゃん』と言える。

山下清三著『文学の虹立つ道』の「白川正美(渥)」の項では、教え子の永栄宗文が話したこととして「『風来先生』の舞台は、鳥取一中らしいですが、人物は師範学校長本橋伝治、博物教諭黒川多三郎、工作教諭佐藤助五郎らしい人物が出て来ます」と記述している。

一九六一年には、津川雅彦主演で『風来先生』が映画化されたが、残念なことに舞台は松江である。この経緯について、山下は前掲著で次のように記述している。

バスを一台チャーターしてほしいという会社の依頼で、白川先生は鳥取市の観光課に交渉なされたのですが、らちがあきません。そのうちに、松江市の方が引き受けるといってきたので、『風来先生』のロケはそこに決まってしまうました。

また、一九六四年には、日本テレビ系列で山田吾一主演による『風来坊先生』が、一九七〇年にはNHK銀河ドラマで大出俊主演による『風来先生』がドラマ化されているほか、米子市・皆生温泉・日パ工場などを取り上げた『人妻学校』(一九六三年講談社刊)もある。

交響作家の揺籃期・後

秦阜梅林 (やすおか ばいりん)

(楽人)

多い。

個人的な信仰の有無や質はともかく、教区に暮らす日常に於いて冠婚葬祭や学校をはじめ、音楽家の生活はかなり教会に根付いてゐる。

5 楽の聖堂

学生時代、僕もよく郊外の教会でアルバイトした。ミサでの奏楽では専らハイドゥン兄弟、モーツァルト、シューベルトからブルックナーと言つた面々のミサはじめ教会の為に書ひた宗教作品を。こんなに沢山あるの！驚嘆すると共に、彼らの日常に触れた気がした。劇場や楽堂の為の日本でも良く知られた曲は、謂はば彼らの『一張羅』であり特別な日の為に詠へたよそ行きで、聖堂には普段着の姿があつた。

教会、特にカトリック教会は實際経験の不足する若い作曲家や指揮者に実践の場を提供する『生きた教室』となつて貢献して来た。

欧州の聖堂に旅した人は気づひただらうが、歴史の中で教会はプロパガンダとして人々に眼で宣教し(壁画、天井画ステンドグラス)画家の想像力と画力を鍛へ：音楽では、パイプオルガン奏者もカペラ(楽団)、合唱団も：極力『人の姿が見えなく』天上から天使の歌声や奏

4 教会の担ふ役割

欧州の音楽シーンは主に①劇場(歌劇場、オペレッタ、ミュージカル劇場)②音楽堂③教会が主会場となつて牽引。エンターテイメント、興行としてのスポットライトは専ら前二者にあたつてゐるが精神的な其れは③にも比重が相当重ひ。西洋文化があくまで基督教文化である意味を、戦後米文化に媚びる現代の我が国は完全に見喪ひがちだけでも。

其処から望むと十代の交響作家シューベルトの誕生は些か奇異にさへ感じるが、就中劇場での成功を経験しなひ彼には、此の道こそが唯一格好の機会！なのであり、他の作家例へばブルックナーもさうであるが、教会からキャリアを築ひた作曲家、指揮者、歌手は欧州には存外

楽が恰も『降って来る』やうな設計で耳を凝らし、意識を常に天に向けるやう設へられた。

そんな残響の長ひ聖堂では『美しく響き』はするけれど、一方で対位法の扱ひに不慣れな指揮者の音を濁し、作曲家の耳を塞ぐ。其処で倍音の響きや美学を掴み、実践を積み重ね力を培はれた者にとって楽堂やら劇場の快適な空間は晴れの日、スポーツカーで高速道路のドライブに等しひ。

6 社会的な意味

然もカトリック教会は、芸術家に充分とは云へなひ迄もそこその報酬を厭はなひ。音楽でも美術でも優れたものを産み、遺す為にある程度の経済的投資が必要な事はキチンと認識されて居るのだ。此処では特にどの司祭云々は言はなひ。勿論モーツァルト親子を悩ましたサルツブルグの例を出す迄もなく人物にはピンキリがある。

其れも含め教会社会全体を云ふのだが。若きシューベルトも、ミサをはじめ幾多大小の宗教作品を、教会の委嘱により『プロ作家』として報酬を貰ひ責任を以って書き、得難ひ貴重な実践の場を與へられ経験を積み（楽譜は写譜され）作品が発表された、神の御名の許に。此の経験こそが十代の交響作家を生んだ所以である。やがては『古

典』となる後期の傑作交響曲もカトリック教会に培はれ、遺された格好。教会はまさに天にこそ宝を蓄へたのだ。

2020.7

今回のディスク F.P.シューベルト

ミサ曲（第6番）変ホ長調 D950

C.M.シュリーニ指揮バイエルン放送合唱団交響管弦楽団

A.シュミット B.他（ヘルクレスザール、ミュンヘン1995

年4月24〜28バイエルン放送録音）

世界は矢印に満ちている

芝野 浩貴 (地球探家)

ヘラクレイトスは「登り坂と下り坂は全く同じものだ」と言った。旧東海道の品川本宿の近くにある街道文庫に街道を歩く前後に立ち寄ることがある。店主の田中義巳さん曰く「街道は行きと帰りの往復を歩いた時に意味を持つ」と。まだ片道しか歩いてない私は素人である。

田中さんは日本全国の街道は走破しているだけでなく、若い時にアメリカ大陸横断にも挑戦して7500キロを完走している。「芝野さん、日本はねえ、20キロも歩けばなんらかの食糧や水に辿り着けるからそれを計算して歩けばいいよ」とも言われた。平地歩きは慣れてると言っても、峠を越える時は高低差に注意しなければいけない。和田峠にしても、碓氷峠にしても、箱根越えにしても、登り坂の距離と下り坂の距離の比により消耗する体力も

違う。上ベクトルと下ベクトルの和が大きいと疲れる。日本百名山を踏破した先輩に、春の那須岳の残雪に囲まれて命の危機を感じたことを話すと、「そういう時は下へ行くのでなく上へ上へと頂上目指して救助を願うのだ」と言われた。

確かに上空からの救助の目線だと尾根の方が沢よりも断然見つけやすい。が、その時は至る所のベクトル場を感じて沢を目掛けて転がり落ちた。八甲田山の頂上では速い雲に直撃して、弾丸のような雹を体に浴びて慌てて下山。雹は上から降ってくるものだと思うていたが、前からやってきた。重力に従い下に向かう力を打ち消すほど、水平方向に動く雲の速さが大きいということである。

西郷隆盛は西南戦争で、熊本城から人吉、鹿児島へと移動した。また、山頭火は昭和5年熊本市内の古本屋「雅楽多」から、放浪するより外に生き方はないとして飛び出し、八代から球磨川沿いに人吉まで歩き、「行乞記」を書いた。その二人を追っ掛けて人吉を訪れた時に、鍛冶屋町通りの味噌醬油蔵には寄ってみた。二人が入ったことのないかつての城内にある元湯人吉温泉にも入ってみた。

人吉城から球磨川を眺めた時に学生がカヌーを漕いでいた。大きさにかかわらずどんな川も、その幅の10倍以上

上まっすぐには流れない。川の湾曲半径はその点における川幅の常に2から3倍だという。流体力学だ。

蛇行という言葉は古代ギリシャ時代のマイアンドロスというトルコの曲がりくねった川の名前から来ている。一般的に日本の川は急だが、江の川は100キロ流れても100メートルしか高低差はなく、かつては舟で輸送していたくらいだから欧州の大河のようにゆったりしている。2年前に廃線となった三次と江津を結ぶ三江線に乗りながら、その勾配を体感した。ナイル河や四万十川でも感じた悠久の時を川が教えてくれた。エメラルドグリーンの川の草原の上をゆったりと飛んで、霧がかかった山々のトンネルに吸い込まれていくのである。7月はこの二つの川も氾濫した。

鳴門の渦潮を思い出した。中央構造線断層帯上にあり、深い海溝と浅い海溝を通るときの海流のスピードのズレと満ち潮と引き潮がぶつかることで起こる大きな渦。「渦を破壊せよ」のスローガンで、1960年代にジェット機時代の到来とともに、渦運動の国際会議が開かれた。ジェット機の翼端から放出される渦が後続機を巻き込むからである。それを克服する超音速旅客機コンコルドが開発されたが、ソニックブームやオイルショックで採算が取れなくなり姿を消した。

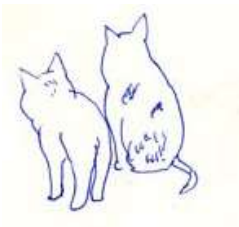
人類学者の長谷川真理子は、「コンコルドの誤り」と揶揄した。動物なら無駄な殺生はしないが、人間は投資した量が多ければ引き返すことができなくなり、損すると分かってももつと投資してしまい、時には身を滅ぼすというのだ。部活指導や学習方法改善を促す時、よく引用させてもらった言葉だが、今のコロナ禍においての経済を意識した無策を考えると、よく思い浮かぶ言葉の一つとなった。

ハミルトンは力を運ぶもの、物を運ぶ流れのイメージで応用数学を発展させる量としてベクトルという言葉を使った。ウィルスベクターは、遺伝子組み換えをしたいDNAを乗せて目的の細胞核まで運ぶウィルスのことである。ベクトルという言葉が共鳴する。スパコン富嶽のシミュレーションで、飛沫感染を防ごうとしている。これもベクトル場の利用。ラカンは言う。「存在者とは一貫性のまわりを回り、間隔を作る。存在はあらゆる意味を消し去ることにのみ定義される」と。

曲面に渦があるかを周辺の情報だけで調べる方法をストークスの定理という。数学的には面積分を線積分で計算する。領域を小さく切って分割し、それを足し合わせ

ると隣同士でうまくキャンセルするのである。SNS 等による誹謗中傷は間違ったベクトル場である。視覚にも錯覚があるように精神にも錯覚がある。矢印の動きが見える人が生きる軸をぶらさないと思う。

（蛇足だが、現中学2年生以下は新学習指導要領で、高校ではベクトルが遠のくことを危惧している。）



滾る小説

古賀 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

最終選考の際、校閲等でお世話になった編集者から以下のようなメールを貰った。

「賞というもののほんとうに水物で、その時々々の環境に左右されますが、なかでも選考委員の顔ぶれ、食い合わせ、ということとは相当大きく作用します。」

この回から文学界新人賞は新選考委員を迎えたわけですが、勢い、野蛮さ、書き手としての切実さ、つまり「新人らしさ」というものを、もつとも重視するという空気が、選考会には満ちていました。

今回のような作風（乱暴にまとめると、文学的な成熟は感じられるが趣味的に見える、ということでしょうか）だと、いまのメンバーのうちには難しいのかもしれない。「音信不通」のコラムのことは伝えてなかったが、ひよっとしたら「落選記」を読まれたのかもしれない。

書きたいものは、完全虚構だが、欲を云えば、仕掛けも凝ったものが書けると嬉しい。

挿入された、些末なエピソード、と云うかディテールが後の方になって、そっか、そう云う風に意味を持って、繋がるのか、と一旦本を閉じ、溜め息を突いてしまうような、企み、と云うか、計算、と云うか、洗練、のようなものに通じる技巧、とでも云うのか、しかし、これは編集者の云う「勢い、野蛮さ、書き手としての切実さ、

またか、と思われるくらい、繰り返し書いて来たので、またか、と思われるだろうが（笑）、僕が理想とする小説は、完全虚構である。完全虚構、と云うのは、自分の体験に基づかない、嘘で固められた小説、と云うことである。

しかし、何で私小説、若しくは私的体験に深く根差した小説、を見限ったのか、何故、完全なフィクションに傾倒したのか、考えてみると、スパッとクリアな理屈が出て来ない、若しくは忘れてしまったので、ちよつと振り返ってみたい。

先々月号に、文芸誌の新人賞落選の顛末を書いたが、以下、その後譚めいた話。

つまり『新人らしさ』というもの」とは相容れないもののような気がする。

特に「書き手としての切実さ」、と云うのは、「切実に書かれることを希求する材料」がある、と云うことだろうから、やはりどうしても私的体験に根付いたものを考えてしまう。

私小説が嫌い、と云うことではない。

自分では書きたくないだけで、山口瞳や色川武大の作品等、面白いと思う。

山口瞳は、本当に書きたい小説なんて、生涯で二作か三作書ければ御の字、と云う。

- 自分は妻帯者である父親と出奔した母親の間に出来た子である
- 実兄だと思っていた兄は、作家とほぼ同時に生まれた先妻の子で、駆け落ちした両親が養育責任を取らされた
- 母親の生家は遊郭
- 幼少時、数年間父が不在の時期があり、海外旅行と聞かされていたが、実際は服役していた

「血族」と「家族」が作者のライフワーク、集大成と云って良いかと思うが、上記四点が、この二作に於ける、

作者の「切実に書かれることを希求する材料」である。Readability を高める為の虚構は幾分あるに相違ないが、大方事実なんであろう。

書く、という行為に関し、以前、作品中で次のように記している。

「個人的な体験に深く根差した事象でなければ書けない」、といっても、私的な体験をそのまま書く訳ではなく、書かれたがっている個人的体験を、一旦ぎりぎりまで手元に引きつけておいてじっと観察し、やがて虚構の彼方に弾き飛ばす（「スリキングショット効果」、と自分では呼んでいる）。

つまり今の僕は宗旨替えしたのである（笑）。

「書かれたがっている個人的体験」から固有性を削ぎ落とし、普遍化すること、を虚構だと思っていたようである。

今は逆だと思っている。

お話は頭の中で作り上げた虚構だけど、登場人物の性格とか話し方とかのディテールに、実人生で出会った人の癖なんかが、忍び寄って来る。これは *Idiosyncrasy*、¹ というのか、あ、古賀啓三の文章だ、という印、若しく

は個性なので仕方がない。

「本当に書きたい小説なんて、生涯で二作か三作書ければ御の字」、というのが嫌なんだと思う。

トラウマのような、露悪的な体験・題材に縋り付き、同工異曲ながら作家生命を捧げて参りましたが、満足の行く、書き切れた、と思うものは二作だけでした、なんて嫌だ。

新人賞受賞作品を系統立てて分析したことはないが、僕が落選した賞の受賞作からも私的体験の匂いがするし、同賞の或る選考委員の新人賞受賞作Ⅱその年の芥川賞受賞作だが、この作家もこの短編と同じ題材で、最近千枚の長編を書いている。

僕の作風は、妙にこまっしやくれていて、滾るものがないんだろな、きつと。

だとすれば、これは実体験としか思えない、日本人好みのジメジメした布団の中のおならのような完全虚構をでっち上げるしかない。



鳥と魚

あきの素生

(くうねるめがね)



生き物を見るのが好きだ。動物園でも海でも道端でも、時間が許せばずっと見ていたい。急に現れるすばしこいやつは、心臓が悪いので苦手だし、家の中にいる生き物(人間やペット以外の)は、あまり、いや全く好きではないが。

最近印象的だったのは、鳥が蟬のハントに失敗した瞬間。じじじつという音に目を上げると、鳥が壁に飛びつき、入れ違いに蟬が飛び去るところだった。鳥が蟬をじつと見送る。鳥は灰色、ヒヨドリだろうか。こんなとき、鳥の名前がすつとわかるといいなと思う。きれいな鳴き声を聞いたときも。

鳥は、身近で見ることができると生き物の中でも、とりわけ好きなもののひとつだ。飛ぶことにあこがれがあるからかもしれない。生まれ変わるならトンビがいい。空高く、気持ちよさそうに、びーひよる、と旋回している

のを見ると、のびのびした心地になる。

数年前、出勤途中の橋のたもとに雄のカモが住み着いていた。光沢ある緑色の頭のカモだ。ひそかに「かもお」と名付けて、その姿を見るのを毎朝楽しみにしていた。かもおは、あるときは川を泳ぎ、あるときは河岸のコンクリートの上に佇んでいた。橋のたもとにいないことももちろんあったが、いつもの河岸に犬が寝そべっていた日を境に、とんと姿を見せなくなった。渡りの季節だったのか、まさか襲われたわけでは、とあれこれ考えながらも、日に日にかもおの不在を受け入れていった。

それからどのくらい経ったか、橋の交差点で信号にかかり、つい癖で川の方を見ると、カモがいた。雌雄の二羽だ。かもおではないかもしれないが、かもおがパートナーを連れて帰ってきたのだと思うことにした。以前ほどではないにしろ、度々かもおたちの姿を見かけるようになり、朝のささやかな癒しが戻ってきた。ある日、かもおとパートナーは河岸の草むらにいて、丸まっているかもおが首だけのぼし、くわー、と鳴いた。そのときのカモおは、いつもの美しい緑色の顔が茶色がかって見えた。のちのち調べたら、カモは繁殖期が過ぎると雌雄同じような羽の色に生え変わるのだという。その後、かもおの姿を見ることがなくなり、雌のカモが三羽泳いでい

るのを少しさみしい気持ちで眺めていたが、もしかしたら、そのうちの1羽が、羽の色の変わったかもおだつたのかもしれない。

海の生き物もいい。磯でカニ、砂浜でヤドカリ。シュノーケルを付けると、ずっと水の中を眺めていられるのがいい。体力と体温と三半規管が許せば（海にぶかぶか浮いているのは好きなのだが、あまりやりすぎると、家に帰っても、ぎざーんぎざーんと体が揺れ続ける羽目になる）。久しく海に泳ぎに行っていない。でも、以前見た光景は断片的ながらはつきりと思い浮かべることができきる。

浜辺からそう離れていない、明るい薄水色の海中をシロギスなどがすいと泳いでいく。岩場で何かをつついている小魚、熱帯魚のようなカラフルなものもいれば、濃い灰色や銀色のものも。地味なようできて、きらきらと光を反射する鱗はやはりきれいだ。かりかりと小さく音が聞こえる。岩をかじる音だろうか。海の中は、静かだ。この小さなものたちが立てるひそやかな音が耳に届くほどに。そんな小魚たちが私の方にわらわらと寄ってきたこともあった。最初は喜んでいたが、えらく距離を詰めてくる。群がってくる。というより、つかかっている。私も餌になりうるのだと、初めて自覚した。

一度、かなり水深のあるところでシュノーケルを付けたまま浮いていたことがある。すると、水底から大きな魚がすうっと上がってきて、私の手前で全身を見せるように水平になり、身を翻して帰っていった。大きな、といっても、マンボウのような大きさではなくて、えびす様の抱えている鯛といった感じ。挨拶に来てくれたのだろうか、と考えたりもしたが、先の例もあるし、餌かと思つて近づいたら、とても喰えた代物じゃないと気付いただけかもしれない。

生き物は、こちらのことなどおかまいなしなところと、よくわからないところがいい。「おかまい」されると、時と場合によっては、ちよつと怖い。



拾うひと



ドラメリア (座敷わらし)

しばらくぶりに実家の別宅に猫が実ったと聞いた。毛が長く顔も横長な白い毛並みの洋猫だそう。ここには定期的に猫が実る……つまり猫がどこからともなく現れて居着いてしまう。ほとんどは子猫だ。ノラ猫が暮らしやすいのだろう。人間に追い出されることはないし、自然あふれる環境で食料にも困らない。

「警戒心が強くてまだそばに寄れない。顔もようわからん」……この別宅を仕事場に行っている父はぶつぶつ言う。

父には困った習性がある。さ迷っている動物をなんでも拾ってきてしまうのだ。猫、ニワトリ、ウサギ、ハムスター……幼い頃の我が家は迷い〇〇で賑やかだった。他にペットを飼っているから、とか家族がいい顔をしないかも、とかそんなことは父は考えない。とにかく拾う。そしてそのためらいのない親切心ゆえか、拾われた動物たちは父にとっても懐く。毎日餌をあげるのも、散歩に出

かけるのも父ではないというのに。傍で見ているも何故そんなに好かれるのかよくわからない。あれはもはやひとつの才能だとすら思う。

「連れて帰らへんで、うちにはもう猫がおるしな」……父は言う。一応わかっただけはいるのだ。しかし、筋金入りの拾うひとである彼のことだ。様子を見ているうちに構いたくなり、構っていれば情が移り、自宅に連れ帰るに違いない。きつとこの次帰省したときには、さも当然のように家族の一員に収まっているだろう。そして、父はいつものようにいちばん慕われるのだ。



・編集後記：

この「音信不通」も気がつけば五〇号。月刊ですから四年以上続いていることになりました。何も特別なことはないですが、少ししみじみ。次の区切りは一〇〇号か？

ドラメリア (編集長)

定有堂教室「読む会」テキスト「江戸の読書会」が面白かったです。限られた書物を熟読した時代の熱量がすごい。いまは乱読。「読む会」の選書がこのところ毎回すごい。

奈良敏行 (発行人)